



ブライシーを考慮し設けられた中庭。白い外壁と大きな庇がつくる陰影のコントラストが心地よい。(東京都 T邸)

圧倒的なクオリティと普遍性

理想の住まいを思い描いたとき、浮かんでくるイメージとはどんなものだろう。空間に足を踏み入れたときに得られる、圧倒的な開放感。年を経るごとに奥行きを増す、上質な素材使い。暮らしのなかで季節の移ろいを味わえる、自然と調和するたたずまい。そういったニーズのひとつひとつを丁寧に拾い上げ、住まう人の美意識や人生観を映し出す邸宅を長年つくり上げてきたのが、高級注文住宅を手がけるハウジングオペレーションアーキテクト(HOP)だ。

HOPをけん引するのは、創業者で宮大工による日本の伝統建築を徹底的に学んだ建築家の石出和博会長。彼は「木を住宅建築に活用することで、日本の森林を循環させ、保全につなげることができる」という発想から、住宅の構造に国産材を活用するべく、独自で木の乾燥技術を開発。国内での良質な原木の確保から製材、流通、設計、建築までを協業化した独自の住宅供給システム「HOPシステム」を確立した。現在は本社のある北海道や東京、神奈川に加えて愛知や大阪にも拠点を置き、街の文化遺産ともなり得るような邸宅を生み出しつづけている。

「真に価値ある住まいとは、心と体を癒やす優しさ、ライフスタイルを受け入れる柔軟さ、歳月を経て深みを増す美しさを備えるもの」と考える石出は、住む人が生涯をかけて愛することのできる、品格のある住まいを実現するべく、すべてにおいて本物を追い求めてきたという。

「良質な檜を求めて吉野の山まで足を運んだり、大理石を原石で入手して加工したり。素材選びには一切の妥協ありません。時とともに味わいを深める、木や土、石などの厳選した無垢の素材をデザインはシンプルなものとし、緻密なディテールによって穏やかで心地よい空間をつくり出しています。建物全体の調和が取れているのは、造作・建具・家具まで、伝統の技を受け継ぐスタッフが自社工場ですべて丁寧な製作しているから。それによってひとりひとりの住み手に寄り添った空間を実現できるのです」

そう語る石出。その上で彼らが意識しているのは、日本の伝統をそのまま取り入れるのではなく、モダンなラグジュアリーさを空間に反映させることだ。

「日本古来の素材を用いながらも独自の再解釈を加えることで、現代的な空間へと昇華させています。庭との一体感があるリビングや、家族が集う居心地の良いダイニング、使い勝手の良いキッチンなど、暮らしの本質を大切に、美しさと機能性を併せ持つ住まいをデザインすること。それと同時に、住まいは街並みを形成するものと考え、周囲に調和しつつ洗練と風格を備えた外観をデザインすることも、HOPのデザインの特徴です。トップライトを設けて時間の流れを感じるようにしたり、坪庭に象徴的な光を取り入れてアート作品のような空間に仕立てたりといった、光の巧みなコントロールも私たちが得意とするところ」

骨董品のように100年後にも輝く魅力をたたえた邸宅を日本の建築文化と森林を守りながら実現する。そんな確固たる哲学が、HOPの建築には息づいている。



Kazuhiro Ishide

石出和博／1946年、北海道芦別市生まれ。73年に藤田工務店に入社し宮大工の技術を学ぶ。89年、一級建築士事務所アトリエAM設立。96年に国産木材活用システム「HOP」を稼働。2016年よりHOPグループホールディングス株式会社、ハウジングオペレーションアーキテクト株式会社代表取締役会長。



Eriko Seki

関 恵里子／2002年にハウジングオペレーションアーキテクト株式会社に入社。06年にHOPグループ広告統括に就任、石出の写真とエッセイを紹介する「Webこころ紀行」の編集長に。11年より東日本統括部長を兼務。13年に取締役就任、15年より総務統括部長を兼務。16年より代表取締役社長。



上／バイクや車、オーディオなど、オーナーの愛用品を展示しながら楽しむ地下スペース。趣味の仲間との会話に花を咲かせるコーナーも。(名古屋 H邸) 下／斜めにずらして配置された2階部分の壁面に照明を仕込むことで、周囲に威圧感を与えず軽やかな印象をもたらすことに成功した外観デザイン。大きな庇やアイアンの門扉と窓枠の黒がアクセントに。(東京都 T邸)